

老舎と學校紛争

——『趙子曰』を基軸として——

杉野元子

一 はじめに

老舎滯英時代（一九二四年～一九二九年）の第二作『趙子曰』の第一章には、北京の名正大學の學生である主人公趙子曰が、同じ下宿に住む學友と、科擧まがいの試験反對および家柄の卑しい校長の排斥という二つの目的でストライキをすることを決める場面が描かれている。そして第四章の冒頭部分には、趙子曰らによって起こされた學校紛争の嵐が過ぎ去ったあとの名正大學の「何もかも破壊された」、じつに凄惨な模様が次のように描かれている。

正門が壊れ、表札がはずれ、ガラスが割れ、窓が飛んでしまっている。校長室はすっかり荒らされ、實驗用器具室はがらくたの山になっている。書類は往來に飛び散り、完全なものは一枚もない。藏書は灰と化し、運のいい『史記』が半分残っているだけだ。天井にはでこでこ泥の跡、床にはごろごろと煉瓦の破片がある。なお息をこらして涙を呑んで講堂の東南の隅に立つ、たん壺を除いては、何もかも破壊されたのである。校長室の外にあるちぎれた麻繩は、校長を縛ってなぐったものである。正門前の路上には緞子の靴が五、六足轉がっているが、教員たちは靴下のま

ま逃げたのである。事務所の鴨居には、三寸あまりの釘で血のこびりついた耳が釘付けにされているが、それは穩健自重をむねとして二十餘年勤めあげた（それが彼の罪なのである）。庶務係の頭から切り取ったものである。校庭の温室の床についているどす黒い血、それは月給わずか十元の年老いた園丁の鼻から流れ出たものである。

かつてこの場面を最初に讀んだとき、私はそこに描かれている状況があつた。その文書が、結果としていかに暗くいたましい過誤や悲劇をもたらしたかは、中國自身の問題としていまは冷靜に省みられるようになってきている。老舎の場合に即して言つても、彼の晩年が文革の嵐の中で悲劇的な運命を強いられ、ついに〈死〉に到つた事實も忘れることはできない。その老舎が、その文革開始のはるか四十年前も前に執筆した『趙子曰』のなかに、われわれの知る文革の時のことを描いているのかと錯覚させるような大學の様子を描いているのである。私は彼の文學像を大きく考えていく上で、いつかはこれを問題にし、老舎文

學の出發期に、すでにこうした形の學校紛争がなまなましく組み込まれ描かれている中國の社會的問題の意味をとらえてかえしておく必要があると考へていた。今回本稿で「老舎と學校紛争」について考へることにしたねらいは、そこにある。

*
しかし老舎自身は、後年「私はいかにして『趙子曰』を書いたか」(一九三五年)のなかで、この作品について「『趙子曰』には、ほとんどいくらの事實もない、あるのは滑稽なダンスのようなおもしろおかしいありさまだけである。」と回想している。また代表的な文學史の本である唐棧主編の『中國現代文學史』(一九七九年、人民文學出版社)は、その老舎の回想に對應するように「『趙子曰』に對して、「嘲笑風刺の筆調で、『五四』以後の學生と學生運動に對して不正確な描寫をしている」と評している。この二つによるかぎり、一九二〇年代初期の中國には作中に描かれた名正大學の紛争のような事件は現實には起きていなかったと判断されることになる。

以前から私にはその點が氣になっていたが、ごく最近入手した『中國文學研究年鑑(一九八七年)』(一九八九年十一月發行、中國文聯出版社)によつて、張強氏が一九八六年に「『趙子曰』の主題思想の再認識」なる論文を發表し、そのなかで、前に引用した作品のなかの名正大學の紛争場面について「これらの状況の眞實性について疑う必要はない、半世紀以上の新聞をめぐれば、このような場面をさがし出すことができる」と述べていることを知った。そして張氏はその中で、近年の文革の時にその『趙子曰』のなかの學校紛争を起こした學生と同じような行動をとる學生がいたという事實を踏まえ、『趙子曰』における「老舎の思想の深刻さと彼の現實主義による創作方法の成功」

をもっと高く評價するべきだという新しい見解を提出しているのである。ただし張氏はその論で、半世紀以上の新聞をめぐれば名正大學紛争と同じような學校紛争の報道を見つけることができる、と書いてはいるが、それ以上の具體的な事例は一つも挙げていない。そこに實證という點で、依然殘されたままになっている問題があるだろう。

以上の立場から、老舎が『趙子曰』のなかに描いている名正大學の紛争の模様が、この作品の時代背景である一九二〇年代初期、當時現實に起こっていた學校紛争の實際の状況とどのように對應しているのかを調査をもとにまず明らかにしたい。その上で、その事件が作品に組み込まれた初期の老舎文學における主題的意味を考え、またそれとともに、老舎が『猫城記』、『大悲寺外』、『牛天賜傳』、『桃李春秋』などその後の一連の作品においても、學校紛争の問題を變わらずとりこみ持續的に描いていく點に注目し、老舎の作品のなかでの學校紛争や學生運動の描かれ方の變遷を通して、その始發點から、晩年の、文革開始までもなく紅衛兵の學生運動に巻き込まれ、ついに悲惨な(死)を遂げた老舎文學の、トータルな歴史的意味をも考へてみたい。

二 一九二二年の中國教育界の状況

張強氏は『趙子曰』の時代背景について、前掲の論文のなかで「五四時代」とし、また高橋由利子氏は「老舎の文學とキリスト教(二)——『趙子曰』と『二馬』——」のなかでそれを「一九一〇年代おわりから一九二〇年代のはじめ」と述べている。しかし私の判断では、以下の諸點から、それを五四時期ではなく、五四退潮期にあたる、おそらく一九二二年秋から一九二三年春までの期間であり、前引の名正大學の紛争は一九二二年の秋に起こった事件として描かれていると推察

するのである。

(1) 作中には趙子曰が天津で出會つた譚玉娥という女性が出てくるが、彼女はいっしょに暮らしている奉天軍の將校について「直奉戦争が終つると、仕事もほろりだしてしまつた。」と語っている。老舎は一九二四年九月にロンドンに到着している。老舎が自分のいない時期の北京と天津を舞台に小説を書くことを全く否定することはできないが、やはりこの直奉戦争は一九二四年九月から十月にかけて起きた第二次直奉戦争ではなく、一九二二年四月に起きた第一次直奉戦争のことをさしていると考えるのが妥當であると思われる。

(2) 一九二二年十二月四日の「晨报」には「清華學校學生會告示」が大きく掲載されている。この告示は清華學校學生會が、北京大學との間でサッカーの試合が行なわれた十二月二日、清華大チームの連戦連勝に腹をたてた北大側の観客がジャッジが公平でないなどと審判にいいがかりをつけて殴りかかり、これをとめに入った清華大チームの選手にも暴力を振るつたことを非難した内容のものである。またその翌日の晨报には「北大サッカーチーム告示」が掲載されていて、北大サッカーチームが清華大の告示文に對して反論を加えている。「趙子曰」の第三章には、名正大對商業大のサッカー試合をめぐる紛争事件のことが描かれているが、これは一九二二年十二月二日に起き、新聞をにぎわした右の北京大對清華大サッカー試合紛争事件のことが下地になっていると思われる。

(3) 作中の第八章から第十一章までは天津が舞台になっていて、天津の街の様子が描寫されている。これはおそらく老舎が一九二二年九月から翌年二月まで天津の南開中學に勤務したときの見聞がもとになつていと思われる。

以上の三點、並びにこの小説には、秋から春までの季節の移り變わりが描かれていることから、私はこの小説の時代背景は第一次直奉戦争後の一九二二年秋から一九二三年春にかけての頃とみなすのが適當であると考ええる。

さてそれでは、時代背景としての一九二二年の中國教育界の状況はどうなつていたであらうか。「趙子曰」では、この名正大學の紛争のほか、趙子曰の友人武端が「商業大學の周校長は、講堂で學生に三跪九叩の禮をしたぞ。三ヶ月前のことだ。」と語しているところがあることから、商業大學でも一九二二年學校紛争が起きていたという設定になつており、また趙子曰の友人周少濂が名正大學を退學させられたあと新たに入學した神易大學以外の全國の學校では紛争の嵐が吹き荒れていた、とも書かれている。

こうした紛争状況の事實的背景を當時の資料で調べて見ると、一九二三年度の『教育雜誌』には、興味深いことに、新聞記事をもとに作成された「民國十一年度學校紛争表」が連載されていて、そこには、計百六件に及ぶ學校紛争のケースが載っている。この表によると、紛争は大學だけでなく高等專門學校や「中學（日本の高校と中學に相當する——筆者）」、さらには小學校でも起きており、範圍は十六省に及び、動員されたケースは二十二件あることがわかる。また一九二三年一月の『教育雜誌』の巻頭には一九二二年の教育界の状況を回顧した任鴻雋氏の文章が載っている。任氏はこの文章で一九二二年の教育界に起きた注目すべき出來事として、學制が改革されたこと、教育經費獨立の運動があつたこと、學術機關の設立が多かつたことという三點を挙げたあとで、つぎのように書いている。

民國十一年の教育界には、もう一つ我々が輕視することのできな
い現象があった。それは各學校のストライキ紛争である。十一年
のストライキ紛争は十年のと、少し異なっている點がある。すな
わち、十年の紛争はその多くが教職員が給料をもらうためにスト
ライキをしたものだったが、十一年の紛争は多くが學生が學校の
問題のためにストライキをしたものだった。このような學校紛争
の波及線は、東は上海から西は成都まで、北は北京から南は廣州
まで、ほとんどありとあらゆる場所に及び、その上紛争が起きた
學校の名前は、枚舉にいとまがなかった。

そして任氏は一九二二年にこのように多發した學校紛争の要因につ
いて、1教職員、特に校長に反對するもの、2試験に反對するといっ
た學校の授業に關するもの、3學校組織に關するものという三點をあ
げている。

魯迅の一九二二年を時代背景とした小説『端午節』(一九二二年)に、
教職員の俸給要求闘争が出て來ることはよく知られているが、老舍も
また『趙子曰』で趙子曰ら大學生が試験反對、校長排斥という目的で
紛争を起こすことを描いた背景には、第一には、このような一九二二
年當時の中國の教育界の紛争狀況があったのである。

ただし「民國十一年度學校紛争表」に掲げられている各學校の紛争
原因をみると、一九二二年に起きた學校紛争には、老舍が描いて
いる名正大學紛争のようなケースばかりでなく、じつは學生側に充分
正當な理由があるケースもたくさんあった。たとえば一九二三年一月
五日の「晨報」は、一九二二年十二月に起きた保定師範學校の校長排
斥運動の背景について次のような校内事情があったと報じている。

この學校の校長劉續曾は學校の地盤を十數年ほしほしに、學

校を私産のようにみなし、校内の中樞には私人をあまねくあてが
つていた。安値で教員を招き、學生に自分の小間使いをさせ、三
度の食事はすべて充分ではなかった。また新思潮を抑壓し、學生
が新しい本や新聞を見るのを禁じた。

さらに「晨報」は、直隸省の教育界の人々は、學生が劉校長を排斥
したのはやむにやまれぬ行動であったと認め、學生側を擁護してい
ると報じている。この記事から明らかかなように、一九二二年の中國では
學生側に理のある學校紛争も起きていた。しかし、こうした紛争のな
かで、老舍は自分の作品には學生側に非がある紛争のケースだけを取
りあげ、描いているのである。なぜだろうか。

家が貧しく大學進學の夢がかなわなかった老舍は、心情的におのず
と庶民の立場に立つて學校紛争を起こす學生たちを見ていた。『趙子
曰』で老舍は「新しい社會には二大勢力がある。軍閥と學生である。
軍閥は人をみれば革のベルトで三回むちうつが、外國人にだけは手
出さない。學生は人をみればステッキで一回なぐるが、軍閥にだけは
手出しをしない。……外國人に手を出さない軍閥は庶民をいじめなけ
れば、軍閥になる資格がまったくない。軍閥に手出しをしない學生も
校長や教員をなぐらなければ、氣骨のある青年とはいえないのだ。」
と書いていて、學生を軍閥と並列させて批判してさえているのだが、學
生が特權的身分層であった當時において、民衆の立場からみれば學校
紛争はやはり自分たちとは無縁な特殊世界の出來事であり、共鳴でき
るものではなかったということだろう。

さて『趙子曰』執筆の背景の第二點として、老舍に關わりの深い北
京一中で起こった學校紛争が一つのきっかけを與えていたと思われ
る。前述した「民國十一年度學校紛争表」にも、この時期の北京一中

の學校紛争のことが記載されているが、北京一中では一九二三年十二月一日に紛争が起きて以來紛争が斷續的に續き、一九二四年九月八日には學生による校長毆打事件が発生し、ついには學校自體が解散させられた。一九二四年十月の「教育雜誌」の「教育界消息」にはこの事件のことが次のように報じられている。

京師一中校長、學生にあやうく毆り殺されそうになる。

京師公立第一中學では、一昨年紛争が起きて以來、學生の中の少數の者が、依然破壊をもくろんでいた。この學校の校長楊子餘は、英國より歸國後銳意改革をした。以前除籍留校處分をうけた學生杜克基、孫金鏞等がまた今月（九月——筆者）四日夜三十數名をあつめ、學監室を取り圍み、のしり叫んだ。楊はこの情景を目撃し、學生がこのような行動をとる以上は、學校から追い出さなくてはこれ以上學校を續けることができないと考えた。ついに布告を發し、杜孫二名を強制退學、劉憲章、龔福慶、畢庶儉三名を一年間の停學にした。ところがなんと二十一日（八日の誤り——筆者）朝七時頃學生の鮑英芝が退學および停學學生を引き留めるために、學生を集め會を開き、校長に出席を求めた。楊校長がちやうど話をしているとき、杜克基等五名が一齊に闖入し、口を開くやのしりはじめた。楊が答えるのをまたず杜等五名は一齊に押しかけて行き、手でたたいたり、足で蹴ったりし、楊を地面に毆り倒した。楊は顔と腰のいずれも傷をうけ、出血し、たちどころに意識がなくなり、人事不省となった。側にいた教職員が前に進み出て助けようとしたがまた毆打された。

北京一中はこの事件の二日後の九月十日解散させられた。むろんこの事件が起きた一九二四年九月、老舎はすでにロンドンにいた。しか

しこの北京一中に、老舎は前年の一九二三年からこの年二四年の春にかけて、當時イギリスへ教育視察に行っていた楊校長の代理として校長の職についていた親友羅常培に誘われ、非常勤講師として勤務していたのである。したがって直接目撃はしていないものの、ごく最近まで自分も教えていた學校が學生の暴力事件がもとで閉校になるというような大事件を、羅などを通じて英國で知ったことは、充分考えられることだと思ふのである。

また第三點として、老舎は「私はいかにして短篇小説を書いたか」（一九三六年）のなかで『大悲寺外』（一九三三年）にふれ、この作品を「自分で経験した或いは實際に目撃した人や出來事」をもとにして書いた小説の一つに分類している。もし老舎のいうとおり、この小説に描かれている、熱心に學生の指導にあたっていた教師が學生から逆恨みをかひ、殺されるという事件と類似した事件を、この小説の設定どおり二十數年前つまり一九一〇年代初期に「目撃」していたのだとするならば、この時の見聞もまた、のちに學校紛争を描いた『趙子曰』執筆を導く下地になったと思われる。

さらに第四點として、老舎の中國近代化のありかたに對する見方を決定づけた老舎における英國體驗の問題を大きく入れて考えないわけにはいかない。一九一八年北京師範學校を卒業してから一九二四年イギリスへ行くまで、ほとんど絶え間なく教職にたずさわっていた老舎は、「わたしはいかにして『趙子曰』を書いたか」で「五四運動を眼のあたりに見ているが、その運動の渦中にはいかなかった。私はすでに仕事をしていたのである。」と回想しているように、國內にいたときも、學生運動に参加せず、傍觀者として學生たちの活動を距離をおいて眺めていた。が英國へ行き、英國の社會狀況との比較の視點を

加え、より遠い距離から祖國の學生たちの活動をみることによつて、『趙子曰』のなかの名正大學のような學校紛争はもとより、五四運動のような學生たちの愛國的活動に對しても冷靜な批判的な見方をするようになつていた。

老舎は『趙子曰』のなかで中國の學生のことを英國の學生と比較して次のように批判している。

英國の中學生は馬に乗れ、鐵砲が射て、大砲が射てる。……中國の學生は軍事教練を「奴隸の養成」といいながら、「英國を打倒せよ。」と毎日叫びたてている。このような雄叫びで英國が打倒できるなら、英國はとくに土崩瓦解しているはずだ。残念ながら、英國の大砲と、誰もがみな鐵砲を射てる國民は、そんな雄叫びにおびえてひきさがるようなしるものではない。

老舎は『趙子曰』のなかで、一讀して明らかのように、李景純という大學生にあるべき理想の姿を託しているが、その李景純の考えとして、次のように書いているところがある。

革命事業をするつもりなら各方面から手をつけるべきだ。……各人の歩む道は同じではないが、目的は同じで、社會を改革し、國民を教え導くことにあり、國民が覺醒したときこそ、革命成功の時機といえよう。もし毛を逆立てて怒りながら、頭がまるでからうばなのに、やみくもに革命を説くならば、それはてん足の女が運動會で徒競争に出たがるのと同じで、望みがなく、夢想にすぎないのだ。

前掲の論文で張強氏は、小説『且說屋裏』(一九三六年)を根據として、「老舎は正義ある愛國的行爲に對しては完全に賛同していた」と書いている。また老舎自身も「私はいかにして『趙子曰』を書いた

か」のなかで、「學生たちの熱烈な活動に極めて同情していた」と回想している。しかし『趙子曰』執筆當時の老舎はじつはただ怒りにまかせて、「頭がまるでからうばなのに、やみくもに革命を説く」のはまったく無意味な行爲であり、まずは自分自身の知識を高め、國民を啓蒙し、國民が目覺めた時初めて革命が成功する、と考えていたのである。

第五點として、老舎の出自が滿州旗人の家の出であつたことが、もうひとつ彼の「革命」觀を決定づけさせたと思われる。老舎は出自からいって、辛亥革命の時はいわば「革命」される側の立場に立っていた。郷容は『革命軍』(一九〇三年)のなかで「五百萬有餘の拔毛駝角の滿州族を誅し、二百六十年殘虐虐酷の大恥辱を洗いつくす」と書いているが、清末のこのような排滿思想は多くの漢人の心を捉えた。冰心は「老舎の遺著『正紅旗下』を讀む」(一九七九年)で、「辛亥革命前、私が小さかつた頃、清王朝政府の腐敗と無能、そして喪權・辱國をひどく憎んでいたため、漢族の一分子であり、また一人の「旗人」とも接觸したことがなかつた私は、旗人に對して、貴族、平民であるにかかわらず、また統治階級、被統治階級であるにかかわらず、一律に反感を抱いていた。」と書いている。また老舎自身も「下郷簡記」(一九六四年)のなかで「辛亥革命には十把ひとからげに一切の滿人を敵視した面が多少あつた。」と革命當時のことを回想している。

革命される側の滿人の一人であつた老舎は、革命というものが不可避的に伴う行き過ぎや混亂に眼を閉ざすことはできなかったのだらう。したがって老舎は、紛争の嵐の中で批判されてもやむを得ぬ人間だけでなく、時にはまったく罪のない人間までもが紛争に巻き込まれ、打倒されるといふことに、強い反發を感じたはずである。

前に引用した『趙子曰』のなかの名正大學紛争の場面においても、老舎は、校長や教職員より、巻添えを食って犠牲となった「穩健自重をむねとして二十餘年勤めあげた庶務係」や「月給わずか十元の年若い園丁」のことにより多くの筆をさき、なまなましく描いている。

三 趙子曰と阿Q

ここで視點をさらに廣げ、老舎のこうした祖國認識の上に立った「革命」觀の立場を魯迅の場合と比較して考えてみることにしたい。

中野美代子氏は「老舎——幽默から正統へ」の道」のなかで「『老張の哲學』から『趙子曰』に至る、主要人物たちのものぐさ、ぐうたら、なげやり、どっちつかず等々の屬性を思いつくまま列挙する時、われわれは必然的に阿Qを連想せざるえないだろう。」と書いている。たしかに農村のルンペン（註）の阿Qと都會の大學生である趙子曰とを比べると、兩者の間には、置かれている環境は天と地ほども違うのに、中野氏が指摘するように、性格には多くの類似點がみられる。趙子曰は試験結果の揭示で名前がどん尻（註）にあったも、「逆に見ていけば一番目じゃないか。」と自分をなぐさめるのだが、これは阿Qお得意の精神勝利法を思い出させる。だが中野氏は、「もし中國が革命しないなら、阿Qもしないが、革命したとなれば、阿Qもする」という魯迅が阿Qについて語っている言葉をかりて、阿Qと趙子曰の違いについて次のように書いている。

老張や趙子曰は、「もし中國が革命しなければ彼らもしない。ま
たもし中國が革命しても、彼らはしない」と言えるであろう。彼
らの「敷衍」性は、「中國が革命してもしない」無爲に連なるか
らであり、従って、この「敷衍」の果ては無國籍的な、或いは安

易な意味における樂天的なコスモポリタニズムとなる。
だがしかし、果してそうだろうか。趙子曰は中國が革命しても革命
に加わらないだろうか。すくなくとも趙子曰は五四文化革命が退潮期
に入っていた一九二二年、「科擧まがいの試験と帝國主義的な命令に
反対しよう。」校長も教員も職員も、みんな殴られるのをおそれて
いるのだ。やつらが試験をやるのなら、こっちも殴ってやろうじゃな
いか。「平等と共和の精神に立ったところで、われわれは布賣りのせ
がれを校長にできない。」といった學友たちの意見に對し、盲目的に
追隨し、學校紛争をおこし、校長を縛り上げるといふ「快擧」を成し
遂げる。たしかに趙子曰は無爲の徒ではない。しかし盲目的な行動力
は直ちに愚行を生み、無爲よりもむしろ恐るべきものとなるのであ
る。

阿Qは、革命黨が城内に來るといふ噂が廣まり、百里四方にその名
も高い擧人旦那が縮み上がり、未莊の人が慌てふためいているのを目
にして、「恍惚」の氣分になり、「革命も悪くないぞ」、「こん畜生ども
をカクメイしてやるか、あの憎い、くそいまいましい野郎どもを。：
おれもいっちょ革命黨にはいりたい。」と思う。もし彼が革命黨
に参加できていたら、金持ちの家から金品を盗み出したり、小Dや靜
修庵の尼さんのような社會的に弱立場にいる者にも危害を加える
という愚行にでていたであろう。しかし魯迅は阿Qがこのような愚行を
おこなうことを想像する場面だけを描き、現實の阿Qは一本の竹箸で
辯髪をたばね上げただけで、革命黨への参加はかなわず、新しく誕生
した革命政權によって掠奪犯人に仕立てられて銃殺される、という筋
立てにした。阿Qは革命の被害者の側におさまり、讀者から深い同情
を寄せられる存在となっている。

いっぽう老舎は、五四學生運動の高まりがおさまった五四退潮期に起きた學校紛争の嵐のなかでまさに阿Qのような學生の一群が輩出している姿をとらえ、作品のなかでこれらの變行を讀者の前にさらしたのである。

趙子曰は「簡便改造論」と稱するつぎのような考えを抱いている。

中國を改造するのは容易なことであり、大總統が命令を下し、全國人民に洋食を食べ、洋服を着、男女が抱き合つてダンスをするようにさせればよいのだ。西洋人と張り合うには、それで充分である。進取の精神とか、研究とか、發明とかをあげつらう暇がだれにあらう。

趙子曰という青年は、前近代的體質を、いわばまやかしの近代でめつきした人間なのである。魯迅は農村の最底邊に生きる日雇いのルンペン阿Qが近代人でなく、近代的理性をもたないさまを描いたが、老舎は五四學生運動の高まりがおさまった五四退潮期におきた學校紛争の嵐のなかでまさに阿Qのような學生の一群が輩出している中國の姿をとらえ、都會の上流社會に生きる大學生趙子曰もじつはみせかけたけの近代人であり、本質は阿Qとかわらないさまを描いたのである。魯迅は阿Qが革命黨に参加し、愚行を働く場面を想像としてしか描かず、阿Qが革命の被害者として銃殺刑に處せられる場面を現實として描いたが、老舎は趙子曰が學校紛争に参加し、紛争現場で荒唐無稽な行動をする場面を現實として描いたのである。

*

茅盾は『趙子曰』を讀んだ時の感想について次のように書いてい
る。

『趙子曰』は私に深い印象を與えた。……その頃(一九二七)ころ一

一筆者)熱い鬭争生活を體驗してきた作家たちの筆による人物と『趙子曰』は少なからぬ距離があった。そのころ私自身もちょうど小市民知識分子を題材にして、執筆を始めていた。しかし『趙子曰』の作者が生活に對してとっている觀察の角度に、私は完全には同意できなかった。

茅盾を初めとする「熱い鬭争生活を體驗してきた作家」はおうおうにして學生運動に参加する學生を肯定的に描く場合が多く、その點で老舎が『趙子曰』のなかで描いた學校紛争を起す學生像には違和感を抱くことになったのであらう。だが、五四運動について、たとえば齊藤道彦氏は次のような見直しの見解を提出している。

五月四日の趙家樓における學生の行動は、素朴かつ前近代的な鬭争方法に止まっており、五月四日學生運動が大衆運動の性格、組織性あるいは民族的覺醒といった先進的側面を示したのと同時に、それと相反する後進的、中世的性格、農民暴動的特徴をもあわせ持っていたのである。こうした點への検討は、運動者側から提起されることはついになく、一九四九年革命後にも引き繼がれ、その手法による鬭争の豫先が四九年革命の擔い手たち自身に向けられるに至ったのが、「文化大革命」期紅衛兵運動であった。五月四日學生運動は、從來、手ばなしの稱賛の對象とされてきたきらいがあるが、感情移入的詠嘆は歴史的分析を停止させるだけである。

五四運動後の一九二二年に盛んになった學校紛争においては、五四運動の大衆運動の性格、組織性あるいは民族的覺醒といった先進的側面を受け繼いだ紛争があったのと同時に、それと相反する後進的、中世的性格、農民暴動的特徴を持った紛争もあつた。そしていわばこれ

ら二傾向のうちの後者の紛争について作品に描いたのが老舎の『趙子曰』であるといえるだろう。

四 『趙子曰』以後の作品に描かれている學校紛争

すでに述べてきたように、老舎は『趙子曰』以後の作品のなかでも、繼續して學校紛争の問題を取り上げていくのだが、それは老舎のどういふ問題意識にねざすのであろうか。またその問題意識はわれわれがこんにちトータルな老舎の文學像を考える上でいかなる意味を持つてあろうか。以下學校紛争を取り扱ったその後の作品とその取り上げ方について、それをまず三つの時期に分けて、列挙し、考えてみることにしよう。

(一) 抗日戦以前の作品

① 『猫城記』(現代)一九三二・八—一九三三・四

紛争場所は大學。この作品のなかには學生が校長や教師を縛り上げ、人體解剖するという『趙子曰』よりさらにエスカレートした學校紛争の場面が描かれている。老舎の批判の鋒先は言いがかりをつけて校長や教師を殺す學生だけでなく、公の物品を横領する校長、教員にも向けられている。なお伊藤敬一氏が一九七三年に發表した論文「老舎の世界」で、『猫城記』のなかのこの場面に注目し、文革や日本における大學紛争の経験の上に立って、一九三二年『猫城記』のなかでこのような學校紛争の模様を描いた老舎の鋭い直感力と洞察力を高く評價すべきだと評していたことが改めて注目される。

② 『晝寝の風潮』(論語)一九三三・一・一六

紛争場所は孔子主宰の學校。孔子が辛稼に晝寝をするなど注意した

ことに腹をたて、弟子全員が孔子に向かつて「ファシズム」とののしる。この紛争は孔子が弟子から出された一、女學生も入學させる、二、今後試験をしてはいけない、三、晝寝を必修課程に定める、四、辛稼に書面で謝るといふ四つの要求を受け入れることで鎮靜する。老舎はこの作品において、弟子におもねり妥協する教師孔子をも批判的に描いているが、批判の鋒先の中心は弟子たちに向けられている。

③ 『眞正的學校日刊』(申報・自申談)一九三三・三・二五

紛争場所は小學校。作中に紛争そのものの場面は描かれていないが、六年生の生徒が試験に反對する方法を検討し、ストライキの標語を考える、そして四年生の生徒があまりにも授業に熱心な歴史の教員を追い出すことを決定するということが書かれている。老舎はこの作品で、批判の鋒先をこのような生徒たちだけでなく、教育に眞剣に取り組んでいない教師にも向けている。

④ 『大悲寺外』(文學月刊)一九三三・七

紛争場所は中學校。月ごとの小試験を廢止する運動が日ごとに擴大していくなかで、學校の秩序を維持するため學生を厳しく處分しようとした學監が、生徒のうらみをかい、生徒の一人によって殺される。この作品では老舎の批判の鋒先は、生徒思いで教育熱心な學監に對して「偽善者」「漢奸」「毆ってしまえ」などと罵聲を浴びせる生徒たちに向けられているとともに、生徒たちを裏で操り生徒を使って學監を追い出させようとした教員にも向けられている。

⑤ 『離婚』(上海良友復興圖書印刷公司から出版、一九三三・八)

この作品の第七章の冒頭に學校紛争について書かれている部分がある。紛争場所は大學。短いので全文を譯出する。「彼(張大哥のドラ息子張天眞——筆者)の今いる學校は試験というものが無い。かつて一

度だけ試験をしたことがあったが、答案を配った途端に、どうしたわけか校長の首が胴體を離れて飛び出し、今に至るまでゆくえが知れない。」この作品では老舎の批判の鋒先は明らかに學生に向けられている。

⑥ 『半天陽傳』〔論語〕一九三四・九・一六―一九三五・一〇・一六

紛争場所は小學校。十幾つも商賣をしていて、身内に役人が五、六名もいる主任教師が免職され、父親が大工をしている貧乏人が新しい主任教師に任命されたため、教員たちは新主任の就任を拒否し、ストライキを行う。小學生も教師に追隨し、ストライキに参加する。この作品では老舎の批判の鋒先は、理不盡な動機で子どもを巻き込み、ストライキをする教員に向けられている。

*

以上見てきたように、老舎は一九二七年の『趙子曰』の後も一九三〇年代前半期を通じ、學校紛争のことをしばしば作品に描いているのである。しかし老舎が自分の作品で『趙子曰』のように學生の側だけを批判的に描いているのは⑤の『離婚』一篇だけで、あとは教員の側だけか⑨、そうでなければ教員・學生の双方とともに批判する書き方で作品を描いている(①④)。しかしそれらを通じ、老舎は學生を擁護する立場からは一度も學校紛争を描かなかつた。當時、五四運動の大衆運動的性格、そして組織性あるいは民族的覺醒といった先進的側面を受け継いだ紛争も起きていたはずなのに、老舎はそういう紛争を作品のなかで描こうとはしなかつたのである。

こうした一九三五年以前の老舎の中國教育界に對する認識のありかたは、どう説明されるだろうか。それは老舎の作品『猫城記』のなかで、猫の町の青年小嶋が地球からきた「私」に對して語つた次の言葉

に要約されるといってよいだろう。

ぼくたちの國の新しい教育制度と教育方法が施行されてから、もう二百年以上たちます。……この二百年のあいだは、毎日毎日、校長がほかの校長か教師と殴りあいをしてゐるか、さもなければ、教師がほかの教師か校長と殴りあいをしてゐるかのどちらかでした。あるいは、學生同士が殴りあつてゐるか、さもなければ、學生が校長や教師と殴りあつてゐるかのどちらかだったので。殴りあうと、人間はたちまち獸に變つてゐます。一度殴ると、そのぶん野生がふえるのです。だから今では、學生が校長や教師の何人かを殺すなどということは、珍しくないことになつたのです。

魯迅は『狂人日記』(一九一八年)のなかで、中國では四千年間「人食い」がおこなわれており、人々は、「自分では人間を食おうとし、しかし他方他人からは食われまいとするから、ひどく疑い深い目つきで、お互いに相手の顔をうかがつてゐる」と書き、依然非合理的な深い眠りの中にあるこうした祖國の舊社會の暗黒面を暴露したが、それに對して一方の老舎は、『猫城記』のなかで、中國では清末に外國から新しい教育制度と教育方法が導入されたが、それ以來教育界では新たな残忍な「人殺し」がおこなわれるようになり、その結果「どこに行つても、あるのは疑心と卑小と利己と残忍ばかりだ。誠實とか寛大とか俠氣とか氣概とかいふものは、これっぽちもない」社會になつてしまつたと書き、中國近代の新社會が、新しさの裏面において抱え込むことになつてゐる新たな暗黒面ともいふべきものを暴露してゐるのである。

*

さて『且說屋裏』(一九三六年)で老舎は、學校紛争を起こす學生に

ついでではないが、父親が日本人を顧問に据えた建設委員会の會長をして一人の女子大生が建設委員會打倒を目指したデモの先頭に立ち、「賣國奴を打倒せよ」と叫びながら旗を振っていることを肯定的に描いている。また老舎は「私はいかにして『趙子曰』を書いたか」(一九三五年)で、「今思えば、私が五四運動の外にいたことは私の思想にきわめて大きな損をもたらしした。『趙子曰』がすなわちその明かな證據である。」と書いているが、いわば一九三五、六年ころを境として、老舎は學生運動に對して好意的な見方もするようになったのである。

しかしその一方でさきに見た『牛天賜傳』(一九三四、五年)では、大會を開き、街を練り歩き、街頭演説をしていた學生が、北方で軍閥の内戦が勃發し、軍閥が今日のうちにも町に來るといふ噂がばつと傳わるや、とたんに蜘蛛の子を散らすように解散してしまつた、とデモ學生を批判的に描いているし、また『殺狗』(一九三七年七月)では、宿舍でしばしば激しい言辭を用いて民族興亡問題を討論しているのに、實際には何も行動に移すことができない大學生たちと、日本人に捕らえられても胸を張つて堂々としている國術師を對比させ、「眞に氣概を持つているのはなんとあの文字をしらない人々であり、何人かの讀書人が旗を振り、叫び聲をあげ、胸を張り出すのを待っている必要など全くないのである」と書いている。さらにまた『趙子曰』や『猫城記』などの初期の作品ではやみくもに「革命」の叫びをあげることの危険性の問題が繰り返し指摘されているのだが、『新エミール』(一九三六年七月)では、純眞無垢な子供エミールが親の誤つた教育方針のもとで「革命」の戰士に改造される過程が描かれている。やや長くなるが引用する。

彼(エミール—筆者)が六歳になった時、私は正義、革命、闘争などといった抽象名詞を與え始めた。これらは當然他のものよりややわかりにくいだが、教育とはもともと徐々に染み込ませることであり、小さい頃から聴き慣れるなら、將來わかるようになるものである。私はこれらの重要で深刻な思想をまず彼の心に吹き込んだ。……私は彼にある名詞を解説し終つたなら、すぐに日常會話の中で、應用させるようにした。彼が使い方を間違つてもまったく恐れなかった。たとえ彼が「喫飯」を「革命」といつてもいいのである。なぜなら彼は少なくともこの二文字をいうことができたのだから。たとえ彼が極めて非論理的に抽象名詞と事實をいっしょに結びつけたとしてもいいのである。なぜならこれは思想がまだ成熟していないだけであり、もう一面では彼の勇敢な精神を充分見て取れるからである。たとえ彼が隣の二禿子が嫌いなので「二禿子を打倒することが世界を救うことになるのである」と叫んだとしてもいいのである。たとえ二禿子の價値がそれほどまでには高くなくても、エミールは結局彼を打倒する勇氣と世界を救う精神をもっているということになるのだから。本當のことをいうと、革命の行爲と思想において精神は實際論理よりも勝っている。私はエミールが話をするのを聴くのが大好きだ。まだ六、七歳ののに、四文字からなる、耳に心地よい、標語のように精練されて整つた言葉を話すことができるのである。エミールはいう、「我們革命、打倒打倒、犧牲到底、走狗們呀、流血如河、淹死你們(我々は革命をし、打倒し、犧牲もいとわれない、走狗たちよ、河のごとく血を流し、おまえたちを溺死させてやる—筆者)……これは子供の肉をすべてはぎ取り、血をすべて吸い取ることに、

彼を根本的に改造する方法である。……私はこのようにしてこそはじめて將來の戰士を造り出すことができるかと考えている。このような戰士は幼い頃から樂しみをすべて犠牲にし、人間性を根こそぎ抜き取らなければならない。このようにしないで、教育によつて人類を改善しようとするなどはまさに夢を見ているのである。

もちろんこれは、一種の觀念的革命教育に對する、老舎による誇張的諷刺にすぎず、豫想でも豫言でもないが、その後の歴史のなかで、「思想教育」「思想改造」が現實にどのようなものになり、どのようなものを生み出したかを考えれば、老舎の「誇張」が單なる誇張でなかつたことを否定することはできない。

(2) 抗日戦期の作品

周知のように抗日戦期の老舎は「文章は下郷し、文章は入隊せよ」をスローガンに掲げた中華全國文藝抗敵協會の總務部主任として、抗戦文學を書き續けたが、そのなかに一つだけ學校紛争を描いている作品がある。

『桃李春風』(文藝先鋒「一九四三・一〇」)——これは老舎が教師節を記念するために趙清閣と共同で執筆した戯曲で、老舎の理想とする教師像をこの作品から讀み取ることが出来る。學校紛争について書かれているのは第一幕である。時は一九三一年ごろ、中學校で熱心に教育に勵んでいた教師辛永年はある日息子から學校で紛争が起きたと聞かされる。紛争はもとも校長が學生に對して不公平だったことから起きたのだが、そのうち校長の策略により、學生達は批判の餘先を辛に向けるようになり、「辛を打倒せよ」というスローガンまでが貼り出さ

れる。しかしここに描かれている學校はもはや『猫城記』のなかの「人殺し」が横行し、日常茶飯事となつていような學校とは異なる。辛は「これしきの挫折で教育を放棄できるものか。」と教育に對する情熱を失うことがない。また學生の側にも辛を尊敬し、支持してくれるものがある。そして第三幕では、一九三七年の蘆溝橋事件のあと、日本軍に投降するのを潔しとしない辛と學生が、強い師弟愛に結ばれながらも幾多の困難を乗り越え、南方へ移動する様子が描かれている。學校紛争を扱いつつも、師弟間の關係の描き方が、抗日戦以前の作品からは大きく變貌してきていることがわかるのである。

(3) 中華人民共和國建國後の作品

李輝氏は、建國前夜の一九四九年七月、北京で開かれた中華全國文藝術工作者代表大會に集まつた文學者たちの心境について、解放區から來た文藝家たちは、「名實ともに解放者であり、兵士たちといつしよに天下をとつた文化人であつて、未來の文藝は、必然的に彼らの歩んだ道の延長上にあつた」、そして一方國民黨統治區から來た文藝家たちは、「解放區から來た文藝家たちを前にして、心から恥じ、延河水を飲んだ光榮を心から羨んだ。」と書いている。老舎は抗日戦争中は重慶におり、抗日戦終了後は一年の豫定を延ばして三年半アメリカに滞在し、中華全國文藝術工作者代表大會にも間に合わなかった。彼の心中は、國民黨統治區から來た文學者以上に建國後の文藝界の空氣に複雑な戸惑いを覺えたことであろう。

建國後間もない時期老舎は『一家代表』(一九五一年)という戯曲を書いた。この作品には、じつは學校紛争の場面そのものは描かれていないが、學生から批判され、戸惑う一人の教師の姿が描かれている。

民主的思想を持つ中學校校長の程善恒は解放前、反飢餓、反迫害のデモに参加したため首になったが、解放後、程は同僚と學生から懇願され、英語教員として復職する。しかし現場復帰してまもなく、自分是一所懸命授業をしているつもりなのに、生徒たちから「悪口」をいわれたため、思い悩む。その時同僚から「それは悪口ではなく批判だ。國民黨統治の時、教員は書物を講義し、學生はそれを聞くだけだった。もし學生が意見を出したりするなら、教師たちはすぐに尊厳を失ったような気がした。……今は學生が言いたいことをすぐに口にすれば、先生も言いたいことがあればすぐに口にできる。こうしてはじめて教學がともに進歩するという長所をうるることができるのだ。」と諭されるのである。

老舎は抗戦期の『桃李春風』では、學生に批判されても自らの指導力に自信を失わず、學生を教え導くことを自分の使命と想っている教師を理想像として描いたが、この『一家代表』では、學生の批判に耳を傾け、自己批判のできる教師を理想像として描いているのである。

しかし毛澤東は一九五七年、「知恵はみな大衆のところからくるのである。私はずっと知識分子には最も知識がないと言ってきた。」と語っているが、このころから知識分子輕視の風潮が表だって強くなり教育現場は混亂し始める。教師は思想改造の對象となり、學生、生徒の側の教師に對する「批判」は、「悪口」、「罵詈雑言」、そして「吊し上げ」へとエスカレートしていった。

五 結 び

一九六六年文革が開始すると、中高生や大學生は紅衛兵となり、學内はもとより、學外へも飛び出し、造反を行い出した。そして知られ

ているように老舎も紅衛兵たちの標的にされたのである。一九六六年八月二十三日、老舎は紅衛兵の糾弾集會に突如引っぱり出され、殴る蹴るの殘酷な暴力を受けた。そしてこの二日後の八月二十五日、老舎は太平湖で死體となって發見された。

老舎が吊し上げにあった二十三日の夜、湖北の五七幹校では、作家蕭乾が睡眠薬自殺を圖った。幸い生命を取りとめることはできたのだが、このような自殺未遂體驗をもつ蕭乾は、のちに「文革についていえば、自殺と他殺とは本質的な區別はない。赤い恐怖が、生きる術もなく、また生き續けたいとも思わないところまで人を追いつめる時、死は唯一の解脱となる」と書いている。肉體的にも精神的にも極限まで追いつめられた老舎は蕭乾と同じように死を唯一の解脱方法と考え、選擇したのであろう。

以下の發言でも知られるように、中國では二十世紀初頭からすでに學校紛争の嵐が吹き荒れていた。『趙子曰』の時代背景の年である一九二二年、北京大學校長の蔡元培は、學内で起きた紛争にかかわり、學生に對して行った演説文のなかで次のように語っている。

わたしは、二十年前革命主義の宣傳が最も盛んだったころ、學生がみな革命の思想を抱き、勇んで試みようとし、さっそく學校の中で試み始めたことをまだ記憶している。……國民が政府に對して革命してもいいのだから、學生も教職員に對して革命をしてもいい、といっていた。そのころ長江一帯は、このようにして革命を試み始めた學校が幾つあるかわからないくらいだった。その導火線はみな簡単なものだった。大半は成績が公平でない、食事がよくないなどの些細な問題のために、一人の教員、あるいは一人

の庶務係に反対し、その後教職員全體に怒りを移し、學校が解散になるまで騒いだのである。

二十世紀初頭の學校紛争には前述した保定師範學校のケースと同じような、學生が封建的で横暴な教職員にたえきれず起こしたやむにやまれぬものもかなりあつたであらうが、學生が「國民が政府に對して革命をしてもいいのだから、學生も教職員に對して革命をしてもいい」と考え、「些細な問題のために、一人の教員、あるいは一人の庶務係に反対し、その後教職員全體に怒りを移し、學校が解散になるまで騒いだ」ということも起きていたのである。こうした紛争の歴史の流れは、老舎の數々の作品から窺い知れるように、中國近現代史を縱い縫いとるかたちで時代を映し、苦澁に満ちた一つの文脈を形成している。従來二十世紀初頭から學生の一部に見られたこのような状況は、傳統的な農民暴動を、中國の歴史發展の動力として高く評價する毛澤東主義歴史觀の下で、その否定面は注目されず、あるいは學生運動の非本質的側面としてのみ扱われてきた。そして老舎がそのような學校紛争の否定面を作品の中で繰り返し描いていることについても、『趙子曰』については張強氏が、『猫城記』については伊藤敬一氏が注目し、高く評價している以外は、ほとんど注目されてこなかった。しかし傳統と秩序と安定を好む庶民の感受性と倫理感を血肉のなかに受け繼いでいる老舎には、祥子のような庶民に對する深い愛情とともに、それと表裏をなす形で、過激な紛争を事とする學生への厳しい批判意識が存在したのである。そしてこのような人間觀や社會觀が根底にある老舎文學は、一般には、どうかすると過去に根ざした舊く保守的な文學と思われがちであるが、じつは學生運動が社會を變動させる大きな力となつてきた中國近現代史がさまざまに孕んできていた

陷弊の問題を冷靜に見据え、鋭く指摘、警告している今日の新しいをも有する文學なのである。

注(1) 『小説月報』第一八卷第三號、一九二七・三から第一八卷第一號、一九二七・一まで第九號を除き連載

(2) 『趙子曰』(『小説月報』第一八卷第四號、一九二七・四、一頁)

(3) 『我怎樣寫『趙子曰』』(『老舍論創作』一九八〇・二、上海文藝出版社一〇頁、もと『宇宙風』第二期、一九三五・一〇)

(4) 唐致主編『中國現代文學史』(二)一九七九・一一、人民出版社・一七四頁)

(5) 張強『趙子曰』主題思想的再認識』(瀋陽師範學院學報(社會科學版)一九八六第三期、四三〜四四頁)

(6) 高橋由利子『老舎の文學とキリスト教』(『趙子曰』と『二馬』(上智大學『外國學部紀要』第一九號、一九八五・三、二三三頁)

(7) 『趙子曰』(『小説月報』第一八卷第六號、一九二七・六、八頁)

(8) 『晨報』には、北京大對清華大のサッカー試合紛争事件に關連して、清華大側の「清華學校學生會啓事」(二二・四、五、六)と「清華學校學生會二次啓事」(二二・八)、北京大側の「北京足球隊啓事」(二二・五、六)と「北京大學全體學生啓事」(二二・七、八)、そして「北京中等以上學生體育聯合會啓事」(二二・八、九、一〇)が掲載されている。

(9) 『趙子曰』(『小説月報』第一八卷第五號、一九二七・五、三頁)

(10) 『趙子曰』(『小説月報』第一八卷第五號、一九二七・五、一三頁)

(11) 常道直『民國十一年度學校風潮表』(『教育雜誌』第一五卷第一號〜第五號、一九二三・一〜五に連載、商務印書館)

(12) 任鴻雋『民國十一年教育的回顧』(『教育雜誌』第一五卷第一號、一九二三・一、商務印書館、二〇九〜二三頁)

(13) 『晨報』第七面、一九二三・一・五

- (14) 『趙子曰』(『小説月報』第一八卷第五號、一九二七・五、四頁)
 (15) 『教育界消息』(『教育雜誌』第一六卷第一〇號、一九二四・一〇、商務印書館、二四六三五頁)
 (16) 『我怎樣寫短篇小說』(『老舍論創作』、一九八〇・二、上海文藝出版社、三五頁、もと『宇宙風』第八期、一九三六・一)
 (17) 老舍の英國體驗については拙論「漱石と老舍——二人の文學者の英國體驗をめぐって——」(『日本比較文學會編』『ヴィジョンの比較文化——美・滅び・異郷——』所收、一九九一・二〇出版豫定、名著普及會)のなかでも論じている。
 (18) (3)に同じ、「我怎樣寫『趙子曰』」九頁
 (19) 『趙子曰』(『小説月報』第一八卷第六號、一九二七・六、九頁)
 (20) 『趙子曰』(『小説月報』第一八卷第七號、一九二七・七、九〇頁)
 (21) (5)に同じ、『趙子曰』主題思想的再認識」二〇頁
 (22) (3)に同じ、「我怎樣寫『趙子曰』」一〇頁
 (23) 鄭容『革命軍』(一九五八、中華書局、一頁)
 (24) 冰心「讀老舍遺著『正紅旗下』」(『冰心文集』第五卷、一九九〇・二、上海文藝出版社、六〇八頁)
 (25) 『下鄉簡記』(『北京日報』一九二七・二・二二)
 (26) 中野美代子「老舍——幽默から正統へ」の道」(『惡魔のいない文學——中國の小説と繪畫』、一九七七・三、朝日新聞社、一二三頁、もと『小野忍教授還曆記念近代中國の思想と文學』、一九六七、大安)
 (27) 『趙子曰』(『小説月報』第一八卷第三號、一九二七・三、三頁)
 (28) (26)に同じ、「老舍——幽默から正統へ」の道」一二三頁
 (29) 『趙子曰』(『小説月報』第一八卷第三號、一九二七・三、七七八頁)
 (30) 魯迅『阿Q正傳』(『晨報』副刊、一九二二・一・二二)
 (31) 『趙子曰』(『小説月報』第一八卷第六號、一九二七・六、三頁)
 (32) 茅盾「光輝工作二十年的老舍先生」(曾廣燦・吳懷斌編『老舍研究資料

- (上)、一九八七、北京十月出版社、二四七頁、もと重慶「新華日報」新華副刊、一九四四・四・一七)
 (33) 齊藤道彦『五・四』北京學生運動斷面』(『五・四運動史像の再検討』、一九八六・三、中央大學出版部、一九三頁)
 (34) 伊藤敬一「老舍の世界」(『中國研究』第三四卷、一九七三・一、日中友好協會、二九頁)
 (35) 『離婚』(『老舍文集』第二卷、一九八一・五、人民文學出版社、二四頁、もと一九三三・八、上海良友復興圖書印刷公司から出版)
 (36) 『滿城記』(『現代』第二卷第一期、一九三二・一一、二二〇～二二五頁)
 (37) 魯迅『狂人日記』(『新青年』第四卷第五號、一九一八・五、四二一頁)
 (38) 『滿城記』(『現代』第二卷第一期、一九三二・一一、二二〇頁)
 (39) (3)に同じ、「我怎樣寫『趙子曰』」一〇頁
 (40) 『殺狗』(『老舍文集』第九卷、一九八六・三、人民文學出版社、四九頁、もと『文學雜誌』第一卷第三期、一九三七・七)
 (41) 『新愛彌耳』(『老舍小説集外集』一九八二・三、北京出版社、七五～七六頁、もと『文學』第七卷第一號、一九三六・七)
 (42) 李輝「文壇悲歌——胡風集團冤案始末」(『百花洲』一九八八第四期、七頁)
 (43) 『北京文藝』第三卷第一、二期、一九五一に第一幕のみ掲載、『老舍劇作全集』第四卷、一九八五、中國戲劇出版社に全文収録
 (44) 『一家代表』(『老舍劇作全集』第四卷、一九八五、中國戲劇出版社、四五七頁)
 (45) 『打退資產階級右派的進攻』(一九五七年七月九日)、『毛澤東選集』第五卷、一九七七・四、人民出版社、四五二頁)
 (46) 蕭乾『負笈劍橋』(一九八七・一〇、北京三聯書店、一〇頁)

(47) 蔡元培「北大十月二十五日大會演說詞（一九三二年十月二十五日）」

（高平叔編『蔡元培全集』第四卷、一九八四・九、中華書局、二七四頁、

もと「北京大學日刊」第一〇九一號、一九三二・一〇・二六〇

*本稿は第四十二回日本中國學會大會（一九九〇年十月二十日、於駒澤大學）
における口頭發表原稿を改稿したものである。